

移住者・福井さん一家



さて、この広い場所。廃校になった小学校の校庭ですが... **この景色を独占**できる場所にも移住してこられたご家族が。



穴掘ってはる。

こちらにお住まいなのは、空き家を改造して写真スタジオを作られた**福井孝尚さん一家**。

いやあ、小学校を勝手に使える感じがいいですね。この土地を自由に使うの、東京の**世田谷区**だったら**50億円**くらいかかりますね。



「子供が好きに遊ばせてもらってます。廃校なんで」

「僕はもともと東吉野村の生まれなんですけど、大学出て、東京で10年ほど働いて、結婚して子供も2人生まれて、上の子が小学校に入るタイミングで自然の中で育てたいなと」

こちらのご出身！でも奥さん、東京の方ですよ。ご本人はUターンだけど、奥さんはどういうご意見でしたか？

「どちらかというとなんか妻の意見でした」

「Uターンありきじゃなくて、自然の多いところを考えると、**自分の故郷はすごいんちゃうか？**って思って。住んでみたら、朝起きると川の音がしてたりとか、ここで生まれたはずなのに、忘れてたことが多くて」



「ここも、もとはガレージだったんですけど自分たちで改装してスタジオにしました」

すぐ隣が駐在所ですね。

「おまわりさんがいてくれるし、郵便局もすぐそばだし。いい温泉も 10 分くらいだし」

バス停も家の前。

「ちょっとづつ動かしてきたわけじゃなくて、ちょうど目の前だったんです」

バス停勝手に動かす人、昔いたらしいんですけどね。



村長はここをクリエイティブな場所にするっておっしゃってました。

「ええ、オフィスキャンプの坂本さん、木工の中峰さん、いろんな人が集まってきて」

お会いしました。いや、村長に「移住者を取材してください」と言われたんで、**定年退職した老夫婦がトマトを植える**取材だったらどうしようかと思ってたんですけど。

「トマトに罪はないですよ」

で、写真のお仕事を。



「東京で10年住んでみて気が付いたのは、**生まれた村はすごいところだった**ってことですね」

すごいところ。

「東京ではいろんなカタログ商品の、いわゆる『ブツ撮り』をしてたんですが、いまは自然や人を撮っています。村の広報誌の写真も撮らせてもらってるんですけど、ここで暮らしている人が『自分たちの暮らす自然はすごいんだ』って再確認できるような作品を撮っていきたいです」



「この村の自然と人を、まるごと記録していきたいですね。村の写真館としてもやっていきたいなと思っています」

ご自身のご家族をはじめ、「移住家族の肖像」シリーズとかいいですね。

「いいですね。移住してこられた方といえば、このあとは、図書館をつくっちゃった青木さんに会うといいですよ」

小さな道の駅

さてさて、本日最後の取材先に伺う途上。



おお、これが村長のおっしゃってた「小さな道の駅」か！



こちらにおつとめの小坂正晴さんと中嶋大喜さんにお話を伺いました。



「こちら、小さな道の駅『ひよしのさとマルシェ』ではここで採れた野菜と特産品を販売すると同時に、村で唯一のコンビニ『ヤマザキショップ』もあるんです」

いやあ、小坂さん、大阪から来た身としては、コンビニがあるとホッとします。中嶋さんはこちらのお生まれで？

「僕はここの生まれじゃないんですけど、なぜかここで働くことになりました...」

働いてみてどうですか？

「まだオープンして1年経ってないんですが、やっぱり**村唯一のコンビニ**ということで、頼りにされてるなど。手作りパンもここで焼いています」



お、これが村長がおっしゃってた「ゆず」の加工品ですね。



村のみんなに苗木を配って育ててもらったという。



「はい。東吉野村で採れるものはこんなにいいんだよ、とみなさんに知ってもらいたいですね。この椅子とテーブルや、正面の柱も、『吉野のひのき』の無垢材の手作りです」



あれも、そうなんです。



では、せっかくなので、変わった形のかぼちゃを買って帰ります。

移住者・青木さん



東吉野村の夜はとっぷりと暮れました。私は都会に住んでいるものですから、**夜というのは本当は暗い**ということを衝撃的に味わっております。なんにも見えません。今からお伺いするお宅の前には、川が流れているようなのですが、音でしかわからない。そこに...



かすかな灯りが。



こちらにお住いの**青木真兵さん**がランプを手にお出迎えくださいました。



橋を渡った溪流の向こうの一軒家。中は、本、本、本。**まさに図書館**じゃないですか。現在の蔵書は約2000冊だそうです。



「ここ、Lucha Libro (ルチャ・リブロ) は自宅兼私設図書館です。東吉野村に移住して、こちらを開設して3年になります。妻がもともと司書をしていたのもありまして週3日、日月火は開館しています」

「**住み開き**、って言葉がありまして」



すみびらき...？

「僕も最近知ったんですけどね。住みながら、オープンな場所にするという考え方です。

この本棚は、内田樹先生が寄贈してくださいました。僕はもともと内田先生の大学のゼミ生でした。

自宅を図書館にするっていうアイデア自体、内田樹先生が自宅を合気道の道場にされてるのを参考にしたんです。ここを夫婦で運営しながら、僕は週5日、檀原市の社会福祉法人で障がい者の就労支援の仕事をしています。もともと僕は博物館学芸員、大学講師をしてたんですが、東吉野村でオフィスキャンプに出会って、移住してきました」

しかし、ここ、川の向こうで、なんだかあの世に来たみたいなおうちですが...

「天誅組の吉村寅太郎が討ち取られた、まあ... なにかの終焉を思わせる土地で、さらに橋を渡らなければたどり着けない家なんですけど、社会関係を絶って隠居してるわけではないんです」

人里離れて、じゃないんですね。

「僕は今の仕事で、ひきこもりとか発達障害とか、そう呼ばれている方にアドバイスする場面もあるんですけど、**孤立しないこと、社会と関わるのが大切**だと言っているんです。その関わりを『社会関係資本』と呼んでいますけど、どのような形であれ『**社会関係資本**』をもって働けばどこに住んでもいいわけで。そのつながりがあるか、ないか、という意味では東吉野村は、若い人がちょっと回覧板をまわしても「ありがとう」と言ってもらえる。都会だと自分を認めてもらうことのハードルが高いじゃないですか。ここではそうではないんです」

「東吉野村に越してきてよかったなと思いますね。引っ越したからハッピーというのではなくて、この図書館を開いて、また自分の職業をもって、さらにいろいろなつながりができて、この3つが揃ってハッピーなれている気がします」



「僕たちの世代でいうと、都会よりもっと感覚の鋭い人と出合いやすいのが東吉野村じゃないかと思っています。移住してきた同世代のみんなが、それぞれ目的意識を持っているからですかね」



「あと、僕、とにかくプロレスが好きなんです。月に一度大阪で、作家の竹内義和さんとプロレスについてのトークイベントをしています。」

ルチャリブレ (Lucha Libre) は、メキシカンスタイルのプロレスのことで、この図書館の名前は、それをもじって図書館のLibroにひっかけて『ルチャ・リブロ』。プロレスと図書館、好きなものをくっつけたんです。『カレーハンバーグ』みたいなもんです」

いや、しかこんなイケメンがこの村に移住とは。まったく予想もつかないことでした。何度も言いますが**定年退職した夫婦がトマトを育てる**インタビューじゃなくてほんとうによかった。

「田中さん、トマトは悪くありませんよ」

そうですね。トマトに罪はございません。

では青木さん。大阪でプロレスの話、伺いますよ、私。

「ぜひ、大阪でお目にかかりましょう」

おなかがすきました

さあ。夜は暗いんです！ 夜になったらおなかが減るんです！ そして**夜になったら寝るんです！** しかも寝る前にはお風呂に入りたいんです！ これは**基本的人権**で保障されてるような気がするんです！



そこで「あまご池 高見山荘」に今夜の宿を求めることになりました。渓流をそのまま引き入れて養殖された数十万尾のあまごが、このようなあられもない姿で私を待っていておりました。腹を割って話そうか**状態**であります。川魚の刺身がこんなに旨いとは知らなかったのであります。



さらには、鮎。もう川魚天国であります。



女将さんは、夕食の時も、朝食の時も、**数十万尾のあまごを野鳥から守る果てしない戦い**のお話をしてくれました。また、最近では野鳥や鹿だけではなく、外来種のアライグマが魚を襲うようになってきたそうで、これも時代の流れですね、と女将。



いいご飯に、いいお風呂に、楽しい女将さん、ほんとうにお世話になりました。

俳句のさと

さて。東吉野村、一泊二日の旅ですので、昨日は初日、一夜明けた**今日は千秋楽**ということになります。そらそうや。

初日は移住されたみなさんを中心にお話を伺いましたが、本来、この『街頭をゆく』は、**自然歴史紀行**です。ですので本日は...



萱葺きの合掌づくり、国の重要文化財に指定されている天照寺薬師堂のとなりに佇む、「石鼎庵（せきていあん）」にやってきました。



東吉野村教育委員会 教育長 **峠隆司さん**にお話を伺いました。



「まずこの句を声に出して読んで味わっていただきたいです。

淋しさに又銅鑼打つや鹿火屋守

さびしさに また どら うつや かびやもり

さびしさに また どら うつや かびやもり」

教育長、3回も音読されましたね。

「鹿火屋、というのは畑の作物を鹿や猪から守るために、畑の中に作った小屋ですね。夜中にここでひとり、火を焚いて銅鑼を鳴らす、自然の中で生きる孤独が伝わってきますね。

これが数多くの名作を残した**俳人、原石鼎（はら せきてい）**の代表句です。ここ石鼎庵は、彼の住んだ家を移築したものです」



おお、この人が石鼎さん。

「石鼎は島根県生まれだったんですが、ここ東吉野の自然のなかで名作を多くつくりました。

そして大正時代の代表的な俳人だった高浜虚子に師事して俳句雑誌『ホトトギス』に六句が選ばれ、一躍認められたんですね。

そして、さきほどの句にあった言葉をそのまま使って、俳句誌「鹿火屋」を創刊しました」



「ほかにも句を挙げてみましょう。

頂上や殊に野菊の吹かれ居り

蛇踏みし心いつまで青芒 」

ああ、どちらも**色彩が目**に浮かぶような句ですねえ。



「その石鼎をはじめとして、東吉野村では、俳句の里づくりを推し進めておりまして、たくさんの句碑が自然の中に立っているんです」

ほんとうに多くの句碑がありますねえ。たとえば山口誓子の

日の神が青嶺の平照らします

これは、さきほどの石鼎の

頂上や殊に野菊の吹かれ居り

と同じ、神武天皇ゆかりの鳥見霊時で詠まれているんですね。

「東吉野村には、全国各地から多くの俳人が訪れます。子どもたちの俳句づくりも盛んで、小学生や中学生の作品にも、力作というか、秀作というか、東吉野の独自性が出ている句が多く出てきています。子どもたちが、有名な俳人の方に指導していただけることを、嬉しく思っています」



「最初の句に戻りますが

淋しさに又銅鑼打つや鹿火屋守

この句にしても、心情を述べているんじゃないんですね」

ああ、なるほど。俳句は、徹底して「自分の外にあることを描く」、写生のところがまず基本にあるわけです。淋しいのは気持ちじゃないんですよ。「淋しさ」は真っ暗な畑の小屋であり、銅鑼を打つ動作であり、熾した火なんですね。しかしそこに人間存在本来の孤独さが浮かび上がり、音が聞こえ、炎の色が見える。

いやあ、俳句というのはたいしたもんですねえ。

さきほど伺った、高浜虚子の雑誌『ホトトギス』に石鼎の六句が選ばれて一躍有名に、っていうのも17文字×6でしょう？ **全部平仮名で書いても102文字ですよ？**

それが載ったら日本中に、「あの人はひとかどの人物」だと。そんなの俳句じゃないとありえないですよ。



「東吉野村に来られた方が、俳句に出会って、石鼎さんに出会って、またここから新しい俳句が広がっていったらと願っております」

天誅組終焉の地

さあさあ自然歴史紀行『街頭をゆく』も佳境に入ってきました。東吉野村といえば、語られるのはこちら。**天誅組。**

明治維新の5年前に「天皇を中心にして幕府を倒す」と挙兵したものの、**わずか40日で壊滅**してしまった『天誅組』という組織を知っていますか。



こちら、村のメインストリートに面したおしゃれなカフェでお話を伺ったのは、東吉野村 天誅組顕彰会会長の**榎本君孝さん**。



「1863年8月13日、孝明天皇が神武天皇陵を参拝すると言いだしたんですね。

それを聞いたのが土佐脱藩浪士の**吉村寅太郎（よしまら とらたろう）**です。彼は同志38人を集めて、わずか19歳の公卿・中山忠光を主将にかついで、天皇を奈良で迎えようと決起しました。彼らはのちに「天誅組」と呼ばれました。

8月17日夕方、五條に着いた天誅組は幕府代官の首を刎ねて「御政府」を名乗ったんですね。江戸幕府に対する初めての革命政府ですね。ここで孝明天皇を待つと」

おお、まさにさきがけだ。

「ところが翌日、『八月十八日の政変』がおこり、攘夷派が失脚して天皇の大和行幸は中止。大義名分を失った天誅組は『逆賊』にされてしまうんです。わずか一日の天下でした。

幕府は大軍を動員して天誅組を討伐します。奈良の山中を追われて、ここ**東吉野村に逃げ込みます**。最終的に追手から逃れる事ができたのは忠光以下たったの7人でした。その忠光も長州藩に逃げ込みますが暗殺されました」

はあ...邪魔になると、公家まで殺されちゃうんだ。しかし、悲劇に終わったとはいえ、勤皇の志士、倒幕の先駆けだったのに、**あまりにも知られていない**ですねえ。



出典：[wikipedia](https://www.wikipedia.org/)

これが吉村寅太郎。NHK大河ドラマ『西郷どん』にも出てきました。兼松若人が演じていましたね。

「せっかくなので、歩きながら彼らの最期の足跡を追いましょう」



「もうここまできたら逃げることに、宮様を逃がすことだけしか考えていない状態ですね。しかし東吉野の村人は急に勤皇の志士がやってくる、幕府の軍勢がやってくる、もう青天の霹靂ですよ」



「ここで天誅組的那須信吾は刀を振りかざして奮戦したけれども、幕府軍の佐藤長三郎に鉄砲で撃たれて絶命したんですね」

なにかの大義を信じて殉じた人にはやはり自然に手を合わせてしまいます。これは大きな矛盾ですが、**世の中を変えようと行動して死んでしまった人は、変わった世の中を見られないわけですね。**

「この事件のわずか5年後に明治維新が成立したんですから、まあ、やはり**時代に対して早すぎた**んですね。ですが彼らの決起がなければ、のちの坂本龍馬や西郷隆盛らの倒幕、大政奉還はなかったと私は思っています。立ち上がった奴らがおったじゃないかと」

吉村寅太郎も 27 日に射殺されます。辞世の句は「吉野山 風に乱るる もみじ葉は 我が打つ太刀の 血煙と見よ」。享年 27。あの、私設図書館を創られた青木さんの家の前ですね。

「両軍に死者が出ました。しかし東吉野の村人が偉かったのは、天誅組、幕府軍にかかわらず、**みな手厚く葬った**んですね。逆賊を丁重に扱ったら、幕府に罰せられるのはわかっとるのに、わけ隔てなく」



「天誅組で生き残った者の中には明治政府の要職についた者もおります。**一番大事なのは、昔と今と、途切れなく時間が続いていること**を知る、これなんですね。毎年、東吉野村の小学校では 6 年生が自分たちで脚本も演出も考えて、天誅組の芝居を上演するんです」

自分に関係ない出来事はない、ってことですね。

「はい。そう考えると**今、私たちは未来を創っている**んであって、後の人たちの暮らしと、ぜんぶ結びついとるんです」



天誅組というのがいて、奈良で全滅しました、というのを本で読んだだけでは「はあ、そうですか」なんですけど、**今日僕がここへきて、歩いて、まのあたりにすると、今生きている自分と関係がある、繋がっている**と感じられますもんね。

「彼らはたしかに滅びましたが、あれは馬鹿なこと、野蛮な戦いだったと片付けたら、それは未来について考えないことと同じなんです」

水の神様

いよいよ『街頭をゆく 東吉野村紀行』も**最後の訪問地**となりました。



丹生川上神社（にう かわかみ じんじゃ）です。

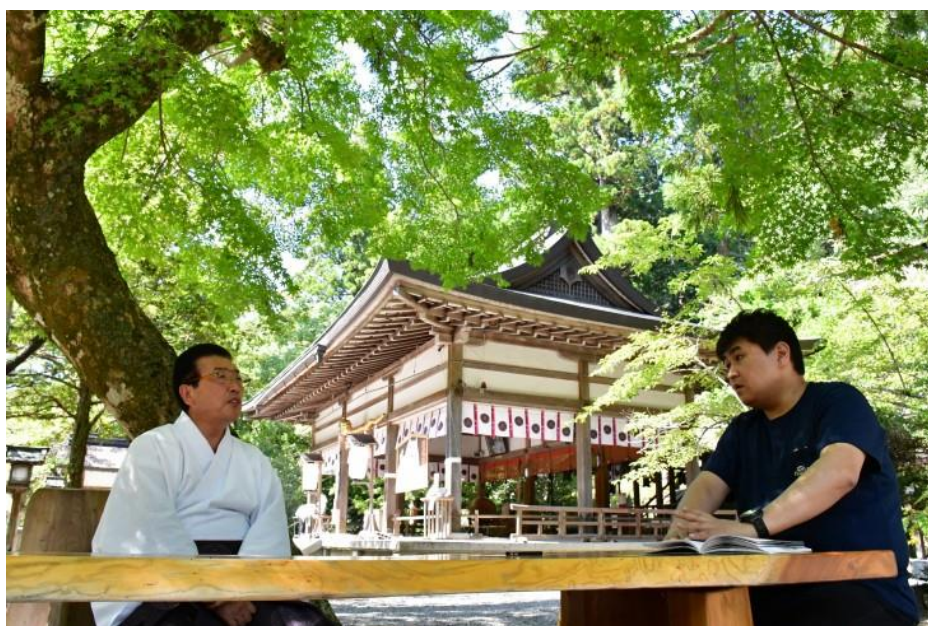
「祭神はミヅハノメです。『古事記』では弥都波能売神（みづはのめのかみ）、『日本書紀』では罔象女神（みづはのめのかみ）と書かれています。水波能売命とも書きますね」



お話をお伺いしたのは、宮司の**日下康寛さん**。

「ミヅハノメは、天照大神よりもお姉さんに当たります。『古事記』の神産みをみますと、イザナギとイザナミとの間に最後に生まれたのは火の神、カグツチなんですね。熱い神様だったもんですから、イザナミの陰部が焼けてしまって、おしっこをしたんですね。その尿から生まれたのがミヅハノメ。それでイザナミは死んでしまう」

神様のおしっこから生まれた神様！ まさに**水が溢れるイメージ**なんですね。



「ミヅハ、というのは水が集まるという意味です。水が集まると小川になります。

小川は蛇のように曲がりくねります。これを蛇行といいますね。さらに小川が集まると大河になって、これは「龍」ですね。

だから、水の神様のシンボルは龍であり、蛇なんです。そこから、みなさんが**蛇の口から吐き出された水の恵み**を受けるのが...

...蛇口！

「そうなんです。蛇口の語源は形がへびに似ているからではないんです」

明治時代に日本に水道ができたとき、水飲み場の水栓を蛇のデザインにしたのは、そういう本来の信仰があったわけですねえ。



「また、川の流れは水力発電のもとになりますから、**全国の電力会社**の方が参詣、奉納に来られます。また清らかな水ということでウイスキーの会社、日本酒の会社や清涼飲料水とかジュースの会社のみなさんもこちらへお越しになります」

なるほど。

「あとは、『お水』ということで、**水商売**にお勤めの方もよくお詣りに来られます」

す、すると、ここで待っていれば**銀座のきれいなおねえさん**がお参りに...！

「**昼間見るとわからない**かもしれませんがね わっはっは」



「この秋祭りは、昭和の頃の写真です。今は1,700人ほどの東吉野村ですが、当時は5,000人以上の村民がいました。**祭りは、合コン**なんです。秋祭りは、昔はつらい農作業が終わった季節に男女が出会う場所だったんですね」

合コン。

「こういったお祭りも、もう一度盛んになるよう努力したいと思っています。古代からこの場所で信仰はあったわけですが、記録ではっきりしているだけでも丹生川上神社の歴史は今年で1343年です。**私の仕事は、歴史に参加して過去と未来をつなぐことだ**と思うんですね」



石灯籠。有名ですよ

「西暦 1264 年から立っております。国の重要文化財です」

一本だけなんですネ。

「昔は灯笼というのは、一基だけだったんです。本来、神様の通る真ん中だけを照らすという意味で。室町以降は一对ということになったんですが、こちらは鎌倉時代のものですので本来の一本の灯笼です」



「私が宮司になった 12 年前には、灯笼に刻まれた文字がまだ読めました。それがこの 12 年で、みるみる読めなくなりまして」

ああ…酸性雨の影響なのか、多くの方がおさわりになるからなのか…。

「750 年も読めた文字が、ついに読めなくなった。私が文字を読めた最後の宮司になりました」



「水の神様ですから、雨が降らなくて困っても、雨が降り続いて困っても、朝廷から祈願に来られました。記録だけでも 96 回来られてますね。

そのとき雨降り祈願には黒馬を、雨やみ祈願の時には白馬を、ここまで牽いてきたんですね。

ですが、けわしい山を越えてきますから、馬が崖から落ちてたどり着かない時もあった。その時に代わりに馬を絵に書いて奉納したんですね」

あ！！ 絵馬！

「そうです。絵馬の起源はこの神社なんです。いまは自分の祈願を書くものに変化して全国に広まりましたけどね」



「お詣りされましたら、もともと神様がまつられていた『夢淵』をぜひご覧になってってください」

神武天皇ゆかりの地へ

「夢淵は日本でも珍しい、3つの川がひとつになっている場所で、深い淵になっているんです」



『古事記』によると、神武天皇が日本建国の際、ヤマトの国と戦うにあたってここで占いをしたんです。お酒の入った瓶を淵に沈め、魚が浮かばこの国を治められると。

翌朝、酒に酔った魚が木の葉のように浮いたのを見た神武天皇は戦勝を確信します。その魚こそ、**魚偏に占うと書く...**」

... 鮎！

「そうです。中国にはこの漢字はありません。魚で占った故事から造った『国字』なんです。そんな神武天皇のゆかりがあるもんですから、ここは鮎の禁漁区になっています」



「今、日本書紀や古事記に記される神武天皇をめぐるストーリーを『日本遺産』に申請しようという動きがあり、東吉野村もそのゆかりのまちが集う協議会立ち上げに参加しています」

... 川の流れのように続いてきた歴史の、**語り継がれたストーリーそのものが遺産**であるという考え方。



ここに立ってみると、まるで物語が身体にしみこんでくるような気がします。



前回の橿原市に続き、**奈良県**でまたひとつ、**日本建国のはじまりの地**に立つことができ、感無量です。



エイドリアーン！！

また来ます 終わりは始まり 東吉野村

山あいの深い自然の中に、日本建国の伝承が横たわる地。絶滅した獣の最後の地、若者たちが壮絶な最期を遂げはしたが、それが今の日本の始まりとなった地。

ここには、たくさんの終わりと始まりが詰まっていました。



そしていま、若い世代がこの村で、新しい日本をクリエイトしようとし始めた地。

この、不思議な終わりと始まりが同居する東吉野村を、私はまた必ず訪れることでしょう。友達になれそうな人ともたくさん会えたし。**なんか一緒に仕事しような。**メールください。

ありがとう東吉野村。過去を学び、未来に向かって動き出せる場所でした。きっと、必ずまた来ます。



東吉野村ホームページ



<http://www.vill.higashiyoshino.nara.jp>

[ライター・撮影]



田中泰延（たなかひろのぶ）

1969 年大阪生まれ

株式会社 電通でコピーライターとして 24 年間勤務ののち、2016 年に退職。ライターとして活動始める。
世界のクリエイティブニュース「[街角のクリエイティブ](#)」で連載する映画評論「[田中泰延のエンタメ新党](#)」
は 200 万ページビューを突破。

Twitter : [@hironobutnk](#)

[広告主] 東吉野村

[編集・撮影] 奈良新聞デジタル編集部